

能「小督」と『源氏物語』

松岡心平

世阿弥が『平家物語』の男性に注目して修羅能を完成させたのに対し、娘婿の金春禅竹は、『平家物語』の女性の方に注意を向け、「小督」「千手」「大原御幸」「熊野」などで男女の具体的な出会いや別れに焦点をあてて現在能に仕組む傾向を見せる。

そうした能の中で、「小督」に特徴的なことの1つは、禅竹作と考えられ、やはり男女の別れに焦点をあてた「楊貴妃」と同じく、『源氏物語』を引くことで能の色どりを深めようとする点にあるだろう。

「小督」のシテ仲国が、高倉院から「寮の御馬」をたまわって小督を探しに出かけようとするシーンを見てみよう。

やがて出づるや秋の夜の、やがて出づる
や秋の夜の、月毛の駒よ心して、雲居に
かけれ時の間も、急ぐ心の行方かな、急
ぐ心の行方かな。

ここに引かれる『源氏物語』は、「明石」の

巻で、光源氏が明石入道の娘を訪れるときに詠んだ、

秋の夜の月毛の駒よわが恋ふる
雲居をかけれ時の間も見ん
という歌である。

光源氏は、明石という田舎にあつて、月の明るい八月十三夜に、車ではなく馬に乗って初対面の明石入道の娘のところに向う。しかも馬は、「月毛の駒」(赤くて白みを帯びた毛色の馬)であり、そこで「月」の掛詞が生きてくる仕掛けである。

この初めての女に会いに行く時の昂揚感に満ちた歌が、能「小督」に転用される。仲国もまた、院から特別に下賜された「寮の御馬」に乗り、八月十五夜の名月の下、恋人ではないが、隠れ住む女性を探しに行くという昂揚の中にあり、光源氏の文脈がほとんどそのまま重ねられるのである。

この引用は、単なる言葉の引用だけではな

く、文脈ごとの引用となっており、そこに見えるのは『源氏物語』に通曉し、これを巧妙自在に引用してみせる禅竹の姿である。

その姿は、「小督」の舞あとの最終場面でも顕著である。

（ワカ）シテ、木枯しに、吹き合はすめる
笛の音を、地謡、ひき留むべきことの葉
もなし、ことの葉もなし

（ノリ地）シテ、言の葉もなき君の御心、
地謡、われらが身までも、物思ひに、立
ち舞ふべくもあらぬ心、今は帰りに……

ここでは、「帚木」「紅葉賀」の巻からの、『源氏物語』中の和歌の引用が見られる。

まず（ワカ）で詠われる歌は、「帚木」巻の雨夜の品定めでの左馬頭の体験談に見える女の歌、

木枯しに吹き合はすめる笛の音に
ひき留むべきことの葉ぞなき

の、ほぼそのままの引用である。

この歌は、「月おもしろかりし夜」に訪れてきた恋仲の殿上人が笛を吹き、家の中の女房が琴(和琴)で応じるといふ場面での、女房の返歌である。「ひき留むべき」の「ひき」が「弾き」「引き」の、「ことの葉ぞなき」の「こと」が「琴」「言」の掛詞となっている。はじめは外にいる殿上人が「懐なりける笛とり出でて吹

き鳴らし、「影もよし」という催馬楽を歌うのに対し、家の中の女房は「よく鳴る和琴を調べとどのへたりける、うるはしく掻きあはせたりし」のように合奏となり、さらに男が歌で戯れかかった上で、女房にもう一曲と所望したときの返歌が「木枯しに」の歌であった。女房は、「木枯しの音に合奏するようなお見事な笛の音に弾き合わせるような琴はございませんし、あなたをひき留めるような言葉も見つかりません」と、「なまめきかはす（色つぼく返答する）」のであった。そう言いながらも女房は、今度は箏の琴を「盤渉調に調べて、いまめかしく掻い弾く」のである。

このような『源氏物語』の場面が、原典の『平家物語』にはないが、能の中で特に設けられたシチュエーション、「酒宴をなして、糸竹の声澄み渡る月夜かな」という、酒宴の中の仲国と小督との笛と琴の合奏の場面に近いことは明らかだろう。

禅竹は、ここで『源氏物語』「帚木」巻の左馬頭談中の女房と高倉院の女房としての小督とを重ねながら筆を進めたと考えていいだろう。

とすると、酒宴の象徴としての仲国による〈男舞〉の前の一句「月夜よし」にも『源氏物語』を影を見ることが可能となるだろう。

もちろん「月夜よし」は、『古今和歌集』六九二番歌「月夜よし夜よしと人につげやらばこてふに似たり待たずしもあらず」の初句の引用である。しかし、そこには「帚木」の巻で、「影もよし」という催馬楽を歌って女房と心を通わそうとする殿上人の影が響いているのではないか。

先に引いたように「小督」では、〈男舞〉あとの〈ワカ〉をシテ仲国が「木枯しに、吹き合はすめる笛の音を（木枯しと合奏するように自分が吹いている笛の音を）」と謡うのを受けて、地謡が大ノリ謡で「ひき留むべきことの葉もなし」と繰り返すが、これは『謡曲大観』が指摘するように、琴を弾くツレ小督の言葉と見るべきだろう。

男と女の音楽での合奏は、能「千手」で平重衡（琵琶）と千手の前（琴）が二人で合奏した後、一夜の契りをとげる風に書かれているように、少なくとも心と心を強く結びつけるものであったにちがいない。

仲国と小督が酒宴の合奏で心を通わせ合ったことは確かだろう。しかし、所詮は仲国は高倉院のメッセンジャーにすぎない。ツレ小督の心内語である「ことの葉もなし」は、シテ仲国によって、「言の葉もなき君の御心（何とも申し上げようもない院のお気持）」と引き取

られ、「われらが身までも、物思ふに、立ち舞ふべくもあらぬ心」と続けられる。主君の高倉院がそうなので自分も物思いに沈んでしまい、立ち舞うような気持ちにもなりませんし、このような雅宴でいつまでも舞っているような身でもありませんので、と言って小督との別れのシーンへつながっていくのである。そしてここにも『源氏物語』の和歌の引用が入ってきている。「紅葉賀」巻で、青海波を舞った光源氏が、翌朝、藤壺の宮に贈った歌、

物思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の
袖うち触れる心知りきや

である。
この歌は、能「楊貴妃」では、下句が引かれ、能の中で重要な役割を果たすが、「小督」では、上句の引用で、終曲をひき寄せる役割を果たしている。

このように能「小督」では『源氏物語』の和歌の引用が随所で利いている仕組みとなっている。ことに、原典の『平家物語』にはない、能としての創造である酒宴・舞のシーンが、『源氏物語』の「帚木」の巻をベースとして生まれた可能性を考えると、能「小督」にとっての『源氏物語』の意味の大きさに思いを致さざるを得ないのである。

（東京大学教授）